

< 2016年12月 >

古賀 順子

パリ・リヨン駅

クリスマスも近くなってきた12月半ば、パリにも師走の冷たい風が吹くようになりました。昨年、11月13日、サン・ドニのサッカー・スタジアムに始まり、パリ10・11区のカフェやレストラン、バタ克蘭劇場を襲ったパリ同時多発テロが発生、130名の死者を出す大惨事が起こりました。フランス全土が暗く、重苦しいクリスマスを迎え、不安や不信感に包まれた年末年始でした。今年も、ストラスブールの「クリスマス・マーケット」をターゲットにしたテロ計画が未然に防止されたこともあり、年明け15日まで、テロ警戒宣言が出され、人が多く集まる所での警備強化が行われています。

とは言え、市民の日常生活は平穏に続き、学校関係は、17日(土)から二週間のクリスマス休暇に入ります。帰省したり、スキーに行ったり、海外旅行を楽しんだり、沢山の人が移動する時期です。パリ・リヨン駅もクリスマスの飾り付けが終わり、バカンス客を待つばかりとなっていました。

パリ・リヨン駅は、名前の通り、パリとリヨンを結ぶ鉄道として、1847年建築家フランソワ＝アレクシス・サンドリエ (François-Alexis Cendrier)(1803-1893)によって設計されました。サンドリエは、「PLM社」(「Paris Lyon Méditerranée/パリ・リヨン・地中海」)の依頼を受け、オルレアン、デジョン、リヨンなど、多くの駅を設計しています。その後、1900年パリ万博時、パリ・リヨン駅は大きく生まれ変わります。ホームも13本に拡張され、パリを始発として、フランス南・東部へ延びる幹線となります。時代はベル・エポック。鉄とガラスが最新の建材として、パリ全体の建物を変貌させる時期です。万博会場としてグラン・パレ、プチ・パレが建立され、ロシアとの友好を記念するアレキサンダー3世橋が架かります。パリ・リヨン駅改造を担ったのは、トウー

ロン生まれのマリウス・トウドワール(Marius Toudoire)(1852-1922)。今日パリ・リヨン駅のシンボルと成っている64mの「時計塔」、駅のファサード、そして、構内には、レストラン「トラン・ブルー」(Train Bleu)を残しています。

大きな鉄の階段とガラスの入り口が美しく、内装も「ベル・エポック様式」をそのままに残した格式の高いレストランで、1901年4月開店から今日まで、フランス・ガストロノミーの伝統を受け継ぐ場所の一つです。パリから南に降り、コート・ダジュールに沿って、イタリアの町ベンティミリアまでを走っていた伝説の列車「トラン・ブルー」(ブルー・トレイン)に敬意を表して、1963年レストラン名に成ります。ココ・シャネル、コレット、ジャン・コクトー、マルセル・パニョルなど、南フランスと地中海をこよなく愛した人たちが、出発前に立ち寄ったレストラン。今日も、憧れの南フランスへの入り口として賑わっています。TGVが走るようになり、パリ・リヨン間は2時間、パリ・マルセイユ3時間15分と、便利で速くなりました。そして、この12月15日からは、パリ・リヨン間に限り、TGV全車両でWi-Fiフリーアクセス・サービスがスタートします。どんどん速く、どんどん便利で、どんどん機能的になるにつれて、鉄道の旅も味気なくなったような気がします。のんびりと風景を見たり、途中下車をする旅は贅沢になりつつあります。とは言え、人を迎えたり、人と別れたり、人との繋がりを象徴する駅の在り方は、今も変わっていません。個人的にも沢山の思い出があるパリ・リヨン駅。ローザンヌから深夜遅くに着いたホームに大きく輝いていたスーパー・ムーン。春一番のミモザの黄色い花を楽しみに出発した駅。

お弁当を持って、皆でわいわい、がやがや、雪山に向けて乗り込んだ列車。いろいろ人が、いろいろな思いで通り過ぎるパリ・リヨン駅を想像しながら、パリでクリスマスを迎えます。